

MyPage

石川県地域づくり推進協議会

C o n t e n t s

》特集 [参加団体紹介]

「地域づくりの多様性」参加団体レポート

やすらぎの里 金蔵学校
わいち商店街振興組合
散歩路
薬師の里・郷土食研究会
ほほえみの会
さわやか いいね金沢
フェアトレードくらぶ
はりんご塾
ねあがりカライダスコープ
安宅まちづくり21
西尾ふきのとう塾
はづちを

》交流とネットワーク

「第18回地域づくり団体
全国研修交流会 岡山大会」

VOL. 12
2003.3

情 報 誌

多様性

異質な存在が出会い、その結びあいによって、
新たなものやことが生まれる。
地域づくりの場においても、
多様なグループや個人が集うことで、
新たな知とさらなる多様性が生み出されやすくなる。



お寺の境内をろうそくの火が彩った万燈会

□金蔵米

「金蔵米(きんぞうまい)」というのも評判になっている。金蔵学校に申し込みがあるのではなく、直接個々の農家に問い合わせがあり、流通しているようである。輪島市内の米屋さんでも「金蔵米」として販売しているところもある。町野の農協でも、別に保管していただいている。底上げ効果は十分あったと思っている。固定客は少ないが、愛知、京都、金沢から1年間、定期的にお米を送って下さいというお客さんもある。

環境ビジネス研究会の方々が見学に来られた際に、田圃一枚を指定して契約し、買い上げていただいた。稲刈りにも参加していただき、おにぎりをほおぼりながら、田圃で語り合った。その後、10月には収穫祭をやろうということで、食談議を行う。金蔵米、山菜、つけもの、焼き豆腐、きのこ汁ともちつきなどを楽しむ。



手書きの金蔵米の袋

美しき農村風景の中で楽しむ やすらぎの里 金蔵学校

代表者：石崎英純 連絡先：井池光信
輪島市町野町金蔵 TEL 0768-32-1320

□新しい学校を創る

「金蔵小学校」が閉校になったことを契機に、「あなたが先生、私が生徒。私が先生、あなたが生徒」をスローガンに、「金蔵学校」をスタートさせる。地域を再発見する活動を続け、5ヶ寺を中心に「やすらぎの里」づくりを進めている。金蔵小学校は体育館だけが残っているが、秋のアート展のために、その前2ヶ月くらい美大生の創作の場として使っている。岐阜の白川郷で創作活動をされている作家の方々が夏場、金蔵の空家を借りて、創作活動をしたいという申し込みも入っている。

今年夏頃のNPO法人化を目指して申請の準備を進めている。着々と体制固めも行っている。

□3回目のアート展

5ヶ寺を会場に絵画、書、水墨画などの作品を展示。絵画では美大にきている韓国からの留学生の作品なども展示。穴水や能都町の作家さんにも参加していただく。期間は2週土日を入れて設定し、週末には芸能も盛り込んでいる。琴、能、詩吟、剣舞、平家琵琶などを披露していただく。参加者からは地元で表現の場があることが非常に良かったと言われている。

□万燈会

昨年、5ヶ寺の境内にワンカップのガラスの中にもろうそくを入れて火をともし配置する万燈会を行う。毎年8月16日に行うことに固定。昨年は5000個を設置したが、平成15年は15000個を目標に行う。昨年は火をともしのに、約70名に参加いただき、見学に来られた方も200名程になる。その際に、室町時代にあった町野の合戦で、畠山氏に焼き討ちされたことを偲んでということをも物語としてつけていたら、東京の畠山家の会から、連絡があり、「焼き討ちの史実は事実です」というお話をいただき、一度こちらにお越しになられたいと、新しい関係が生まれつつある。

□ツツジ千本計画から桜千本運動へ

3年計画でツツジを千本、お寺の周辺の土手などに植えてきた。平成15年4月に完了。少子高齢化にともなって荒廃していく地域の環境整備をしようと、学校立ち上げと同時に里づくり構想を作成。まず、お寺の周辺の崖をきれいにしようと千本運動を始める。千本運動の目標は達成したけれど、まだまだ足りない。第2弾として、桜千本運動を企画。桜の並木ではなくて森をつくろうと考えている。さらに、我々の集落の水の源となっている「保生池」の整備も計画中。この池の周辺の山には針葉樹が6割ぐらいの面積に植えてあるのですが、それを枝打ち間伐して、整備したい。広葉樹をはさみながら、道路には桜並木を作ろうという計画になっている。5月の下旬ぐらいから整備活動をスタートさせたいと考えている。雑木林もツルを切ったりしないといけない。来年の春には桜を植えたいと考えている。土地改良の「水と土のふれあい事業」が入っている。道路舗装と同時に森で楽しむための散策道路の整備も同時に行う必要がある。みんなで森をつくろうという参加型の運動として展開したい。金蔵は高台の盆地で川がないので、貯水池が命の池になっている。その周辺の整備は集落の人間にとっても重要であると同時に、森や水の重要性を体験しながら知っていただくために、森づくりの体験ができるとうい。川で遊ぶ、森で遊ぶ、農業体験などいろんなメニューが可能です。



アート展での作品



万燈会のあかり

ソフトを駆使してにぎわいを創る わいち商店街振興組合

理事長：中濱英隆 連絡先：専務理事 川谷内清隆
輪島市河井町わいち4部45番地 TEL&FAX 0768-22-9901
<http://www.jeims.co.jp/waichi/>

□ バリアフリーな商店街

わいち商店街の特長のひとつはバリアフリーな商店街であるということ。1998年に行われたバリアフリータウンフェスタ'98全国デザインコンペ「あなたのまちのバリアフリー改造計画」の最終選考会で、全国から応募された41作品の中から、わいち商店街振興組合の「輪島朝市バリアフリーステーション」が優秀作品に選ばれた。その結果を踏まえ、市が情報ステーションを兼ねた公衆トイレを設置してくれた。朝市などに行かれる方のための車椅子、および電動スクーターが置かれている。午前中はボランティアガイドが常駐し、観光客への情報提供や案内を行っている。

今後も、ソフトウェアを充実させることで、バリアの少ない商店街づくりを目指している。

□ 「わいち」?

わいち懐隈(かいわい)は、昭和初期より、劇場や商店、飲食店等が立ちならび、多くの人々で賑わう街である。東には能登でも屈指の歴史を持つ重蔵神社が鎮座し、西には朝市が立つ朝市通りがある。輪島で一番元気の商店街を目指して、平成5年に中浜町商店会から「わいち」に名前を変える。毎月第2土曜日に開催される「わいちまつり」や輪島の旬を食する「わいちごっつお村」等を通して、人と人との触れ合いを第一に考えたまちづくりを進めている。

□ ソフト事業でにぎわいづくり

町内には飲食関係の店が多いが、ビアガーデンの無い地域であったため、商店街によるビアガーデン営業を試みようと、平成4年に「第1回わいちBEERパーティー」を開催。平成7年まで毎年開催し好評を博すが、より魅力的な事業にしようと、平成8年には重蔵神社の境内で「わいちごっつお村」をBEERパーティーも含めて行う。平成

9年には、「わいちっち」(現在の「わいちまつり」)に発展させる。わいちごっつお村、BEERパーティー等のイベントを拡大し、毎月第2土曜の夜、商店街で実施する。各店の得意なメニューを出して食で特長をアピールするとともに、特設舞台では輪島市の吹奏楽とか太鼓の演奏を行っている。

周辺でも多様なイベントを試みている。幸せの黄色いハンカチにならってハンカチに絵を書く事業、子供達に通りで遊んでもらおうと道に絵を書くこともやってきた。最近では、通りを飾ることに取組んでいる。4月には桜の花を街灯とか電柱に飾っている。ろうそくをともしての「光の道」とかもいい雰囲気づくりにつながっている。

お客様の絶対数が少ない1、2、3月は、「やぶ」さんなどの建物の中で談議を行っている。テーマに「輪島を考える」とか、「わいち商店街を考える」などを設定し、地域の食を楽しみながら語り合っている。

□ 新たな仕組みを考える

これまでも、いろいろなイベントを実施してきたが、「わいちまつり」は過渡期にきているのかもしれない。今年も12月まで実施し、その間に議論を重ねつつ、今後のことを考えてゆきたい。能登空港の開港や重蔵神社の前に建設中の工房長屋がまもなくできることをうけ、更なる魅力アップのためには、新たな仕組みも期待されている。工房長屋でも体験ができるようになるようであるが、商店街全体でもそのような楽しみづくりに取組みたいと考えている。

昨年より始めた「地物市」も人気が高まっており、商店街以外の方々とのつながりも深まっている。最近元気のいい「金蔵学校」の皆さんも特産品を持って参加してくださっている。継続は力なりという面もあるが、常に新たな仕掛けをしていくことも大切である。



写真:上
わいちまつりの一環で、冬季は食談議を開催。まちづくりについて語り合う。

写真:中
商店街でのバンド演奏

写真:下
街路整備の完成記念事業では、キリコが通りを彩った。

わいちまつりの様子
(雪の中の太鼓演奏)



野鳥を通して、自然を考える 七尾西湾の自然にふれあう会「散歩路」

代表者：時国公政 連絡先：田島義久

鹿島郡田鶴浜町田鶴浜二部260番地 TEL 0767-68-6423



全日本バードソン大会in田鶴浜

□野鳥の宝庫

田鶴浜町は、豊かな緑の山々と波静かな七尾西湾を擁した野鳥の宝庫で、珍鳥クロツラヘラサギや天然記念物コクガンなどが飛来する。昭和58年には県が一带を鳥獣保護区に指定。町立小学校3校を愛鳥モデル校としたり、平成2年には能登で初の野鳥観察舎を建設、同10年には田鶴浜野鳥公園が完成している。

七尾西湾の自然にふれあう会「散歩路」は、そうした背景を受けて、平成11年に誕生。自然についての知識を深め、ふれあい活動から次代を担う子どもたちの郷土愛を育て、未来に引き継いでいこうと、野鳥公園を拠点に活動を行っている。

□家族でできる活動

親子が一緒に参加できる行事として「巣箱づくり」、「ふれあい探鳥会」、教育委員会と共催の「星空の観察会」、「野鳥おもしろ講座」、また、会報「さんぽみち」を発行し、会員150名にバードウォッチング情報を提供している。毎年7月24日を「七尾西湾の日」として、広域的な連携を図りながら、海岸清掃のボランティア活動なども行っている。地元では、平成5年から町商工会青年部が、全国の野鳥愛好家を招き、バードウォッチングと野鳥クイズを解きながらのマラソンをミックスした「全日本バードソン大会in田鶴浜」を継続開催している。

□能登半島野鳥楽園化構想

平成12年には「田鶴浜町野鳥楽園化構想推進協議会」を設立し、各種団体と地域住民の連携が図られている。

冬季の休耕田に水を張り、シベリアから飛来するカイツブリ、マガモなどが越冬する環境づくりも行われた。また、行政エリアを越えた広域的な連携が望ましいと、「能登半島野鳥楽園化構想」に向け、広報活動も実施。町と地域づくり団体が一体となって野鳥保護活動を進めている、この構想に対し、毎日新聞より「毎日・地方自治大賞」奨励賞が贈られている。

□人材育成が課題

団体の今後の課題としては、野鳥ガイド、ナチュラリストの養成など、人材育成がある。これまでは、平成2年に常陸宮殿下より日本鳥類保護連盟総裁賞を贈られた、同連盟石川県支部長の時国公政さんの助言や功績に拠るところも大きい。施設の維持管理等も含め、時国さんをサポートしていける後継者の育成が求められる。

また、施設の運営体制が、少数の愛好家を対象としたイメージになっている。能登空港の開港や、観光の質的深化が求められる時代に、新たな体験型観光メニューとして生かすためには、運営体制の見直しも必要となってくる。

□協議会に望むこと

各地域づくり団体では、可能な限り主体的に事業に取組むとしても、最後の調整やとりまとめ役は事務局でないといけないこともある。支援するための事務局というかたちは今後残るべきでしょうね。

地域づくり推進協議会は、規制されないファジーなところが良い。一般に行政が組織する会は、事務局がしっかり

している場合が多く、委員として参加しても、なかなか変えられない。協議会は、言ったらやってしまう。会議で事務局に、「これはできませんねえ」と言われてしまったら、できるかも知れないことでもストップしてしまう。これまでは、そう言わない姿勢が一貫していた。

シンポジウムでも、参加者が少なくなつて関係ない。イヤイヤ来てもらったところで、長続きしないし、聞きたい人が来てくれれば良い。



巣箱づくりは親子で楽しめる活動

写真:上
クロツラヘラサギ
写真:中
ふれあい探鳥会のような
写真:下
自然や野鳥をテーマにした
写真展も開催



商品開発の検討風景

□地域の素材で特産品を

私たちの活動の基本は特産品づくり。商品化を目指しているものは、『梅の甘露煮』と『梅ジャム』。『ところ天』、『梅ゼリー』など天草を使ったものもあります。お店を持ってないので、お客さんの反応を見ながらイベントで試販しています。季節や会場、お客さんの層などを考えて、他に『タコ飯』など色々なものも出しています。試作ものでは、『ゆずの皮のお菓子』や『ゆずのジャム』なんかも。

七尾商業高校の生徒さんに、試販用のラベルを作ってもらったのが縁で、バスケットボール部が『梅の甘露煮』をスッカリすると気に入ってくれて、試合の前や練習の後に食べてくれているんです。

□地元の梅を生かす

地域の梅を買い取って原料にしています。かつて転作作物として梅を植えていたそうで、梅の木がたくさんあるんですが、市場に出しても二束三文なので、皆もてあまして自家用の梅干や梅酒なんかにならしか使っていない。それをうまく使えないかというのが始まりだったんです。

『梅の甘露煮』は、食べたことがない人が意外に多いので、まず受け入れてもらうことから。1年目は、京都・大阪・東京のイベントに試食品を持って行き、千枚前後のアンケートを回収できました。去年初めてイベントだけで試販してみました。地元の道の駅や七尾駅前リボン通りのバザールにも少しだけ出しています。あとは注文で。今年は6月から毎夜つくります。目標は千個。遣い物にしてもらえよう、お土産用のパッケージも作ってみました。

□天草も地元のもので

普通、ゼリーはゼラチンだけど、能登には天草があるので天草のゼリーを作ってみました。天草で作るところ天は固いので、「結構固くなるんじゃない?」って思われますが、分量を調整すると意外とプルプルン感が出て、年配の方にも好評。イベントに持っていくと、即完売します。



新たなデザインの『梅の甘露煮』、『梅ジャム』

産品開発から体験交流まで 薬師の里・郷土食研究会

代表者：岡部 淳子 連絡先：濱 和代
石川県七尾市東浜町八部55番地 FAX 0767-59-8030

□産品づくりを地域に根付かせたい

商売になるには、相当数造れないとダメなんですけど、有職婦人ばかりの今の段階では程遠いかな。とりあえず、地域にある梅を無駄にしないように。年配の方がたくさんいるので、楽しみの活動として根付いてくれたら良いかと。

今、農業短大に商品の成分分析をしてもらってます。美味しい商品開発のためには、梅の種類から勉強しないと。植えられているものは5、6種類あります。甘露煮にして美味しい梅、美味しくない梅。ジャムに向く梅、向かない梅がありますね。

□ツーリズム

子どもたちに色々な体験をさせてやりたいなあ、という思いから、年に1回、大イベントの国際交流をやってます。県内の国際交流員や英語助手の人たちを、薬師の里に招いて民泊してもらっています。去年、薬師塾の方々が受け皿になった国の事業では、大学生も夏休みに二人いらして、十日程いろんな体験をしてました。地区には海も山も川もあり、私らには普通のこと、街の人にしたら「へー、こんなこともあるんだ」という体験が結構できたのでは。山の木を下ろしたり、漁船に乗って定置網を見学したり、農作業もできる。七尾市内の人も、釣りたてのイカを食べたら止められんで、「イカ釣り体験やってよ」って言われる。

立山も見慣れていれば空気みたいだけど、初めて見た人は感動モノ。星がきれいだし、海がきれいだし、月が綺麗。ホテルを見ただけでもいいですよ。すごい数のホテルがクリスマスツリーのようになるんです。

京都・大江町のイベントにも参加



薬師の里フェスティバル



□障害を超えて

参加メンバーは40名弱、健常者が10名ほど参加しています。昨年は仲間内のお楽しみ会しか出来なかった。最初の頃はパソコン通信からスタートしたので、講習会を開いたりとかパソコン教室を開いたりとか、人の家に向いてパソコン通信について教えたりしてきた。最近は体験発表会を主に行っています。

自分たちは様々な障害を持っていますが、障害を持つからどう生きてきたかを紹介しあう会を開いています。ほほえみの会のいいところは、障害のあるなしに関わりなくコミュニケーションを持とうとしていることと、障害の種類に関係なく参加していること。そのような方々に体験を語っていただく機会を作っています。メンバーに順番に話してもらったり、ボランティア活動をされている人に話してもらったりしています。スポーツに取り組む人、障害者と結婚した人、聴覚障害のある人、障害のある子供を育てているお母さんなど、いろんな人に話していただいています。苦労や気をつけていることなど…。



福祉住環境コーディネーターという資格もありますから、そういう方々と組んで、仕事ができればいい。

□動くことでバリアーを低くする

自分達が動いていくことで物理的なバリアーを取り除いていくことが大事だと思う。ぶどう狩りがしてみたいということで加賀のぶどうやさんに問い合わせをしたら、すぐ、車椅子で入れるトイレを用意して下さった。おかげで毎年いけるようになった。同じく、カラオケ屋さんに車椅子で入れるトイレが出来たということで、カラオケにもいけるようになります。

養護学校が低いとか、健常者の学校が高いとかという差があること自体がおかしいと思う。施設にいるから不幸せということもなくて、施設にいると身体的なフォローは万全で夜中でも安心なんです。そこで自分がどう生き甲斐をもって生きるかが問題なんです。

自立したいと望んでもどこに相談したらいいかわからないという人が多い。自分たちの経験を活かして、いろんな相談にのってあげられるような会が作れたらいいと思う。

□ホームページの作成を

聴覚障害の人はパソコンより携帯メールを多用しています。たしかに、携帯メールは便利なツールです。さらに、体験発表で紹介いただいた経験をまとめて発表できるといい。ホームページなどで掲載することで、だれでもが見ることができるになれば、障害者だけでなく健常者にも見てもらえるので、接点も作りやすくなります。

これまでも常に課題にかかっているホームページの作成をなんとかしたい。

障害者と健常者が一緒に活動 ほほえみの会

代表者：城下由香里 連絡先：飯田康宏
河北郡内灘町字ハマナス2丁目64番地 TEL 076-286-6248

□ネットワークづくり

障害の種類を越えてつながると同時に、各団体を結びつけるネットワークをつくらないといけないと思う。

パソコンを教えられるメンバーは少ないので、いろんな要望に応えられるようにはなっていない。将来的には、パソコンを活かした仕事ができるようになることや、障害者が暮らしやすい環境をつくるための仕事も可能性があります。



恒例になっているぶどう狩り&バーベキュー



1992年8月にほほえみの会設立

会員制の助け合い

特定非営利活動法人さわやか いいね金沢

代表者：代表理事 中野啓子

金沢市横川4-153-1 TEL 076-247-9117

<http://www.npo.jp/ishikawa/sawayaka-iine>

さわやかいいね金沢は会員制の助け合い組織である。例えば、ひとり住まいのお年寄りから要請があれば、掃除、洗濯、買い物、食事の用意などの手助けを行う。これがホームヘルプ事業。このサービスの利用者も、手助けするボランティア・スタッフも、ともに会員である。利用者は受けるサービスに対して決められた利用料を支払い、ボランティア・スタッフは決められた金額の報酬を受け取る。いわゆる有償ボランティアによる助け合い活動である。

□任意団体からNPOへ

同団体は昨年10月に任意団体からNPO法人に切り替え、組織を強化した。法人になってからの半年間の活動状況は、ホームヘルプの利用が106件、移送サービスが21件、ふれあいサロンの利用者が197人、託児が124人。

移送サービスとは、病院に自力で通院できないお年寄り



こどもの手話教室も事務所でテーブルを囲んで行う。こどもたちは覚えが早い。

や障害者を、病院と自宅の間を車で送迎すること。ふれあいサロンとは、同団体の事務所を使って開講する各種教室のことであり、リースづくりや押し花細工などを、会員で教えあっている。また、事務所の一室を利用して託児も引き受けている。

金沢市横川町にある事務所の予定表には、ホームヘルプ派遣などの予定がぎっしり書き込まれている。事務所の中は静まり返っているが、実際は何人もボランティア・スタッフが地域のどこかの家庭で助け合い活動をしているわけである。

同団体のサービスを利用する人が約70人、ボランティア・スタッフが約60人。これをコーディネートするには、専従

の事務職員が不可欠である。しかし、利用料収入だけで事務職員の給料を捻出することはできない。多くのNPOが抱えている財政面での問題に、ここでも突き当たる。収益を改善するため、同団体では介護保険指定事業者になる準備を始めた。

□公募事業への企画提案

昨年度、さわやかいいね金沢では公募事業に企画を提案した。金沢市には「ボランティア養成塾」の開講、石川県には「コミュニティ図書館」の起業を提案し、事業を委託された。委託事業だから財政的にゆとりは出なかったが、知名度が上がり、地域の人たちとのつながりも生まれた。

「ボランティア養成塾」では、講師になってくれたNPOのリーダーの人たちと知り合え、ネットワークが広がった。

□コミュニティ図書館

「コミュニティ図書館」ではスタッフ雇用の難しさを知った。利用者が少なかったので事業の継続もできなかった。だが、地域の母親たちから、こどもの安全なたまり場として、継続を希望する声が寄せられた。活動を理解してくれる人の輪が確実に広がった。

スタッフも成長した。「ボランティア養成塾」と「コミュニティ図書館」の経験を活かし、こどもの手話教室と料理教室を自主事業で行った。どちらもスタッフが講師を務め、こどもたちに混じっていきいきと動いていた。

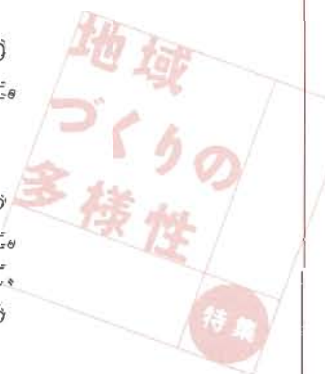
代表理事の中野啓子さんは活動を通して「地域の壁」がなくなることを願っている。横川町は農家と転入者が同居する住宅地であり、両者の関係が希薄だという。互いに関心を持ち、やさしい気持ちで助け合うこと。それが当たり前になる地域づくり。3年目を迎えたさわやかいいね金沢で、中野さんは地域のこどもたちにも目を向け始めている。



こどもの料理教室。親子での参加も多い。こどもたちが料理に参加できて、なおかつ、狭いキッチンでつくれるように、献立を工夫する。



事務所で開いたボランティア・スタッフの学習会。消防署の救急隊の方から人工呼吸を教わった。



市民芸術村で開かれた講演会。
インドのNGO代表者が児童就労について報告。

□インドからのゲスト

フェアトレードクラブでは、昨年5月10日にインドのNGOの方を招き、講演会とワークショップを開いている。120名の参加者があった。当協議会のコーディネーター派遣制度を利用し、講師謝金に充てた。この制度があったから実現できたと事務局スタッフの葛葉むつみさんは言う。

講演会では、インドのフェアトレード団体「タラプロジェクト」代表のムーン・シェルマさんが、インドでの児童労働の現状と不法児童就労をなくす取り組みを語った。また、ワークショップでは、貧しい国の孤児になったことを想定したカードゲームを行いながら、児童労働について話し合った。ちなみにこのカードゲームは、フェアトレードクラブのスタッフが開発したものである。



ヒーを売っていたら、その産地のルカニ村から感謝状が送られてきた。村の社会福祉に貢献しているという理由だ。世界とのつながりを感じたという。

□お金が廻ってこそ地域づくり

物販は同クラブの重要な活動である。途上国の貧しい人が生計を立てられるように、仕事をつくらなければ支援にならない、と考えているからだ。「お金が廻ってこそ地域づくりなのに…」と。講演にからめて物販をしようとすると、お役所の人は営利事業とみなして公共施設を貸してくれないこともある。説明も聞いてくれない。“壁を感じる”という。

当協議会については、やや遠い存在であるという。例えば、村おこしの議論に、フィリピンの村など途上国の事例が参考になると感じているが、その共通点を協議会のメンバーに理解してもらえるだろうか、と尻込みする。

協議会の事務局の人にも、活動にもっと関心を持ってくれたらという。「金銭面で助けていただけてだけでなく、助成してもらった事業の成功と一緒に喜んでもらえるような、人と人とのつながりをつくっていけたらと思っています」。

同クラブにとって、地域づくりとは「顔が見える関係をつくること」。相手のことを気かければ、キリマンジャロの村の人たちともつながりをつくることができる。関心がなければ、お隣さんとですら、関係をつくれない。自分の暮らしと人や物とのつながりを感じたり、考えるようになり、何をするにも、そのような目でとらえる人が増えてくれば、地域はきっと変わっていく。葛葉さんは語った。

海外からゲストを迎える フェアトレードクラブ

代表者：干野亜紀 連絡先：コミュニティトレードの店「a1」
野々市町本町2-1-24 TEL076-246-0617
<http://www.h4.dion.ne.jp>

□フェアトレードとは

フェアトレードとは「公正な貿易」と直訳できる。日本には途上国から農作物、繊維製品など、様々な物が輸入され、日本人の生活に不可欠になっている。ところで、それらの商取引はフェアに行われているのだろうか。途上国の生産者や工場労働者に、生活できないほどの低賃金で働かせているようなことはないだろうか。それらの情報を集め、アンフェア（公正でないこと）な状態をなくそうとしているのが、フェアトレードクラブの活動である。「自分たちの暮らしと世界とのつながりを考える活動」と同クラブでは位置づけている。小学校や中学校、母親学級などに呼ばれて研修に出掛けることもある。そのときはカードゲームを使う。

同クラブの“兄弟組織”として、フェアトレード商品を販売する店舗「コミュニティトレードの店「a1」」がある。コーヒー、紅茶、チョコ、衣類、布製品、装飾品など、カラフルな商品がにぎやかに並べられている。いずれもアジア、アフリカなどの途上国の“村おこし産品”である。お客さんには商品のいわれを必ず説明する。どこで造られ、その国はこんな状態で、売り上げはこういうことに使われると。

楽しい話を聞いた。キリマンジャロのコー



鳥越福祉会「青い鳥」の野菜チップスも販売。同店の超人気商品でリピーターも多い。最近、カジマートでも販売するようになりましたよ、とわが事のように、葛葉さんは喜んでいる。

コミュニティトレードの店「a1」



ルカニ村から届いた感謝状。
カラープリンターで出力したものに手書きサインがある。



新たな組織、活動へ はりんこ塾

代表：藤木克彦 連絡先：畑 竜太郎

石川郡美川町字浜町ヨ103番地 TEL 076-278-8190

URL <http://www2.nsknet.or.jp/~fuji1/index.htm>

地域
づくりの
多様性



川のそばに作られた増殖池

□「はりんこ」とは

トゲウオの仲間のトミヨのことを地元では「ハリンコ」と呼んできた。年配の人にうかがうと「昔はハリンコなんかうじゃうじゃあった」と言われるくらい、身近にたくさんいた。しかし、ここ20～30年くらいの間に、川の水質が悪くなるとともに減少してきています。石川県のレッドデータブックで絶滅危惧種に指定されています。現在では、志賀町、美川町、根上町の一部にしか生息しておらず、手取川扇状地が南限とみられています。

形態的には、体長5～6cmで、鱗を持たず、せびれに8～9本のトゲがあり、はらびれ、しりびれにも各1本のトゲを持つため、ハリウオ、トゲウオとも呼ばれる。

□通年での生息調査の実施から

平成8年には1月から12月までの延べ12回に及び現地調査を実施。正確な実態を把握することから、具体的な提案を行う。提言の柱は2つ。一つは天然記念物の指定、もう一つが河川管理の徹底と保護増殖のための池の設置です。池は町が県の稀少生物の保護事業の補助金をもらって安産（やすまる）川のそばに作った。

平成9年に提案して以来、6年かかっているが、平成15年ようやく町の天然記念物に指定される。平成9年に発表したトミヨの生体調査報告書のタイトルが「天然記念物指定を目指して」となっていた。美川町としては初めての指定である。もちろん指定されたからと言って喜んでばかりもいられないので、次は県の指定になるのかどうかはわかりませんが、これを一つのステップとして活動を深めていきたい。

□はりんこ自然教室

美川町が行っている社会教育活動「みかわ学園」で「はりんこ自然教室」という講座を担当している。年間5、6回の講座を企画し、はりんこ塾塾生やいしかわ動物園の職員、日本野鳥の会会員等に講師をお願いしている。はりんこ塾の塾生は参加者であり先生役に関わっている。

8月に行う「手取川親子ふれあい自然観察会」がメインの行事。実際に親子で川に入って魚を捕まえて観察します。いしかわ動物園の淡水魚の専門の方に来ていただき、魚

の特徴とかをお話しいたします。この活動は5、6年は続いている。塾生が小学校からの要請を受けて、まちの先生として教えに行くことも多い。

□安産川の清掃

ハリンコのいる安産川の草刈りとか、ゴミ拾いなども定期的に実施。地元の人達が行われる活動にも参加している。最近、川がきれいになってきているためウグイが増えてきています。ウグイはハリンコを食べるのではないかという話があるので、安産川でのウグイの生息調査も実施しています。

冬場は川に入ることができないので、野鳥観察会を例年行っている。手取川の河口は野鳥の宝庫でもあるので、バードウォッチングに適しています。会員の友人知人に日本野鳥の会の会員がいらっやいますので、解説をお願いしています。

□新たなステージへ

はりんこ塾のメンバーは15人と少ないので、活動には限界がある。そこで100人規模の大きな団体を組織して、新たな活動にも取り組んでゆきたい。美川町周辺の自然環境の保護などの活動をやっていきたいと考えている。それとは別個に地域づくりのテーマがないか、ということについても検討してゆきたい。昨年から何度も議論を重ねているが、なかなか結論は出ていない。それでも、平成15年度の間には新たな組織を立ち上げたい。



自然体験教室を多く開いてきている



はりんこ せびれに大きなトゲがあるのが特徴



根石修さんの「ティー&トークセッション」。
ブータンのバター茶づくりを実演。

6月に行ったイギリス研修旅行。
最終日はロンドン見物。バッキンガム宮殿前。



身近な国際交流から世界を広げる ねあがりカライダスコープ

連絡先：事務局 谷口健一

根上町山口町二3 TEL 0761-24-4339

<http://nkaleido.hp.infoseek.co.jp> (変更しました)

ねあがりカライダスコープは平成6年に結成された。民間ベースの国際交流活動をしている。ふるさと創生事業のひとつとして、町が「根上創成塾」をつくり、その卒業生が中心になり、外国人をホームステイさせた経験を持つ人たちにも呼びかけて結成された。町内の企業には中国、インドネシアなどから来た企業研修生も多く、彼らとの文化交流や支援を中心に活動を進めている。

□身近な人たちとの交流を通して

主な活動を紹介しよう。「ティー&トークセッション」は町内や近郊在住の外国人や国際交流活動をしている人を招き、講話してもらうもの。昨年度は、小松市国際交流員の内ヶ崎ミノルさんがブラジルのこと、根上町国際交流員のアーチャナ・バスデフさんが「イギリスにおけるインド人社会」について語るなど4回開催。

ボーダーレスパーティは、町内で働く外国人労働者（企業研修生）や国際交流員との交流会。料理は参加者が持ち寄るので、各国の料理が揃い、歌や踊りも披露される。

また、昨年は初めての海外研修旅行を実施。根上町国際交流員ジェシカ・ハイドさんのコーディネートで、彼女のふるさとのイギリスを訪問。ホームステイや現地の小学校で日本文化の紹介などの交流活動を行った。

同センター代表の秋尾晃正さんが「根上創成塾」の講師をしたつながりがあり、ねあがりカライダスコープも参加した。これが思わぬ広がりを見せている。

ラオスの状況を知った根上中学校の生徒が書き損じはがきを集め、社会福祉協議会を通してねあがりカライダスコープに持ち込んできた。ホームページを見た、奄美大島の中学校からも送られてきた。

はがきをセンターに送ると、支援するラオスのこどもの名前などが記載されたラオス教育省認定の証書が送られてくる。そこには生徒の顔写真も添えられている。根上中学校の生徒が支援したラオスの少女は、今年の夏に小学校を卒業できるという。

ねあがりカライダスコープでは、特定の国や姉妹都市との交流ではなく、根上に来た人を通して世界と触れようとしている。「ティー&トークセッション」を40回も経験することで、世界各地の様子を、自分たちの生活や根上の町に置き換えて、考える習慣ができてきたという。

□国際交流とは自分たちの位置を知る活動

青年海外協力隊でブータンに滞在した経験を持つ、小松工業高校教諭の根石修さんから、ブータンの人たちののんびりした暮らしを聞いたときには、経済的な貧困とは別に、豊かさについて考えさせられた。寺井町国際交流員のカテリーナ・ドウツツスさんからドイツの環境への取り組みの話聞いたときも、根上町のゴミや自分が出しているゴミのことに、自然に意識が向かった。国際交流とは自分たちの位置を知る活動のことなのだ。

□ラオスの小学生の就学支援

2000年から「書き損じはがき収集活動」も始めている。書き損じはがきを集め、ラオスのこどもの就学を支援するもの。ラオスは小学校就学率66%。貧困のためこどもたちが満足な教育を受けられない状況にある。1年間の通学費が1万円で、それは書き損じハガキが250枚あれば足りるという。この支援の仕組みは日本国際交流センター（東京）がつくった。

ねあがりカライダスコープで就学支援しているラオスの少女。名前、学校名などが書かれたラオス教育省認定の証書。顔が見える関係になっている。



ヨークシャー州マーフィールド町にホームステイ。同町のバティフォード小学校でジャパンディを開催。日本文化を紹介した。



ケンブリッジ大学日本語学科の学生と交流。
同大学の運河で舟遊びもした。



環境づくりがまちづくり 安宅まちづくり21

代表者：会長 沖本浩三
小松市安宅町乙66 TEL 0761-24-4170

安宅まちづくり21では平成8年から桜の苗木の植樹を行っている。10年間で1000本を目標にしてきた。安宅だから義経千本桜なのだろうか。ともかく、今年も春先に9年目の植樹を終えた。同団体の代表、沖本浩三さんの案内で、桜を見てきた。

□桜を植え続ける

場所は安宅海岸の松林である。防風林の中を走る500メートルのサイクリングロードに沿って、桜が植えられていた。9年目ともなると、ちらほら咲いている木や、3メートルくらいに伸びたものもあるが、ほとんどが背丈くらいの若木で幹も細い。松林のみどりに紛れてしまい、遠目には桜だと分からないだろう。

近づいて見ると、一本ずつに植樹した人の名札が付けられている。安宅中学校の運動部の名前もある。環境教育の一環として部活単位で参加してくれるのだという。



植えられた桜には名札がつけられている。自分で植えた木であることを実感でき、大切に育てる気持ちになるという。

サイクリングロードをしばらく歩いた。砂地では桜が育ちにくいので、山土を運んでから植えること。桜の育ち方にばらつきがあること。いたずらで抜かれることもあるが、名札をつけてからは被害が減ったこと。桜は11種類も植えられ、開花時期をずらしていること。桜の苗木は県の事業「健民桜名所づくり」を利用し、無料で提供を受けていること。沖本さんの話を聞きながら歩いた。ずっと桜が植えられていた。9年間の活動の厚みを知った。5年後には小松で有数の桜並木になり、10年後にはサイクリングロードが花見客でいっぱいになるに違いないと思った。

桜の植樹は思いつきで始めたものではない。いや、思いつきで始めたものであっても良い。見落としていけないのは、そこには綿密に練られた計画があることだ。桜の育成には手間がかかるが、害虫駆除、施肥、下草刈りなど、これから必要になる維持費について、同団体では石川森林管理署とすでに協議を行い、周到に準備している。

□住民の意見を反映させた事業提案

安宅まちづくり21は平成6年に結成された。安宅には安宅関、北前船主の屋敷、梯川、安宅海岸、小松空港など、小松を代表する史跡、施設、自然がある。ところが、ベッドタウンとなり、都市化の悪い面が目立ってきた。安宅の町に住民の連帯感や地域の活力を取り戻すため、地域の壮年層を中心にグループがつくられた。

結成まもなく、地域開発などの公共事業に住民の意見を反映させるため、2500世帯を対象に住民アンケート調査を行った。回収率は75%に上った。

観光開発よりも安宅の自然資源を大切にしたい、道路整備は町内に車が入り込まない安全な計画にしたいなど、住民の意向が明らかになった。これを元に小松市に事業提案を行った。

□シンクタンクからドゥタンクへ

設立当初は安宅町内会連合会とも軋轢があったが、一連の活動により、安宅まちづくり21の実力は誰もが認めるところとなり、連合会も諮問機関と位置づけた。北前船主米谷邸の跡地は小さな公園になっているが、住民アンケートを元に安宅まちづくり21が連合会に公園プランを答申し、それを連合会が小松市に提言して実現したものである。

安宅まちづくり21は住民がつくった、コミュニティのシンクタンク（研究機関）であり、ドゥタンク（実行機関）である。豊かなアイデアと行動力を持っている人が地域にはたくさんいることを、安宅まちづくり21の活動は教えてくれる。



米谷邸跡地にできたポケットパーク。安宅まちづくり21の提言が実った。梯川の河口にあり、散歩コースになっている。



安宅まちづくり21でつくっている桜並木。サイクリングロードの両側に植えられている。



地域
づくりの
多様性

特集

地域内外の交流を重ね、地域を再評価する 西尾ふきのとう塾

代表者：濱田みちる

小松市沢町へ59-1 TEL 076-246-0617

地域
づくりの
多様性

□西尾野菜市

小松の中心部から車で約30分、山間のまちが西尾地区である。人口約750、世帯数250戸くらい。地区内に尾小屋鉱山資料館や大倉岳高原スキー場がある。自然に恵まれているが、高齢化と過疎化も進んでいる。

西尾は最近、西尾野菜市で知られるようになってきた。5月、8月、11月に各2日間、西尾の人たちが西尾の産品を持ち寄って市を立てる。登録会員は60名だが、毎回

春の作業に集まったボランティアや地元住民。ある参加者が“市長サロン”でこの桜のことを市長に報告、それをきっかけに3万円の肥料代が予算化された。



20名くらいが出店。小松市内や近郊の町から多くの人が集まる。今年で6年目になる。

また、西尾小学校が校区外からも生徒を受け入れる特認校になり、町の子が通学していることでも、西尾は注目を集めている。このような都市住民と西尾の交流が生まれるには、いくつかのきっかけがあった。＊地元企業コマニーのCD研究室が西尾を研究テーマにしたこともそのひとつである。

※コマニーCD研究室は組織改編により、現在は総合デザイン研究室となっている。

□ワークショップを通じて

同研究室は1995年から“西尾通い”を始めた。96年と97年は西尾をフィールドに、ワークショップin小松という住民参加のワークショップを開催。西尾地区に町の人を送り込み、西尾の宝物探しを行うことで、西尾の人たちに地域の魅力を再認識させることを試みた。そこから住民グループ「西尾グリーンツーリズム研究会」が誕生し、彼らの発案で、西尾野菜市が始まった。外からの刺激が地域に内在するエネルギーを引き出した好例となった。

西尾ふきのとう塾の代表者、濱田みちるさんも、この一連の交流活動に携わってきたメンバー

のひとりである。西尾の環境に魅せられて8年前に一家で転居。地元へ溶け込むため、地区の行事に参加するうちに、地域づくり活動を始めるようになった。

西尾ふきのとう塾は、昨年は野菜市に出店する以外に目立った活動をできなかった。わら細工教室などを開いたが、参加者はこどもばかり。親世代の参加は先生役の人だけで、世代間交流にならない。この活動は必要とされていないのでは、との思いもあり、やや停滞気味だが、今年は西尾小学校の課外活動やPTAの元気が良いので、新たな展開が期待できる。地元陶芸家の指導で野焼き教室を計画中だ。

□しだれ桜

一方、西尾グリーンツーリズム研究会のメンバーとしての濱田さんは、新たな活動として、西尾地区の松岡町にあるしだれ桜の保護に取り組んでいる。樹齢60年、県内最大級のしだれ桜である。寺井町の樹木医、立花武志さんの指導を受けながら、春と秋に草刈りや施肥を行っている。濱田さんが立花さんの園芸講座に参加し、そこで知り合った町外の園芸愛好家に呼びかけ、この活動は始まった。桜を見慣れている地元の人は何事かと思ったが、立派な桜だと聞かされ、今年は町内の人たちも作業に参加した。それが新聞報道され、桜が満開になった週末には、20台ほどの車が列をなすほどにぎわった。新聞に拠ると、近くのお年寄りが「地元の宝や」と目を細めた、とある。外から刺激を与える手法を、ここでは濱田さんが実践し、成果をあげた。

「いろいろ新しいことが始まって、西尾が楽しくなってきたから、このまま住んでようかな」と言ってくれる人も現れてきた。それが濱田さんには何よりも励みになる。



春の草刈のときに、「うちかた」を手伝った松岡と沢のおばあちゃん。おいしいおむすびなどをつくって振舞った。

小松市松岡町にある推定樹齢60年のしだれ桜。健康状態は良好とのこと。



地域づくり実践講座のコミレス実習を
はづちをの茶店で開催。
男性参加者もちらほら。

不用品の提供を受けた。県が公募した“NPO協働推進モデル事業”（H14年度）に指定され、203万円の予算がついた。ここに至るまでに、約1年の準備活動があった。

□地域のコーディネーター

事務局の吉田さんはNPO講座にしばしば参加しており、そこで当協議会コーディネーター濱博一氏や私（赤須）と知り合い、当協議会の会員となる。また、NPO研修情報センターの世古一穂氏とも県の研修で知り合う。こうした出会いを活かして、加賀市に世古氏を招き、“行政とNPOの協働”をテーマにした地域づくり談議（8月）と、コミレスについての地域づくり実践講座（1月）を開催した。どちらも当協議会の主催事業であり、「はづちを」は金銭的負担なしに、このふたつのイベントを開催できた。もちろん、開催までには幹事役として、市役所や地域づくり団



地域づくり談議は石川県九谷焼美術館で行われたが、“第2部”の世古一穂講師を開いた意見交換は会場をはづちをに移した。

□行政と地域づくり団体の新しい関係

山代温泉総湯の前にある加賀市の施設「はづちを楽堂」に、市民団体「はづちを」は事務所を置いている。そのため同施設の管理団体のように思われがちだが、名前に非営利活動市民団体と前置きしているように、山代の住民でつくった地域づくり団体である。正会員には商店主や飲食店主、旅館経営者が多いが、地域住民の交流を活動テーマにしており、商工観光振興は第一番目の目的ではない。まわりくどい説明になってしまうのは、「はづちを」が行政と地域づくり団体の新しい関係の先駆けであるからだ。従来なら地元商店街が管理を請け負ってきたであろう。ところがこの施設は、NPOの創意工夫で運営している。そこが新しく画期的で、また、悩みの多いところでもある。

□専従職員の人件費を稼ぐ

施設「はづちを楽堂」の目的は、高齢者の利用と賑わい創出である。この目的にかなった施設運営をするには、企画力や営業力が必要となり、能力を持った専従職員が不可欠である。ところが、加賀市からの施設管理委託費は、ほとんどが光熱費などの経費であり、職員の人件費は含まれていない。そこでNPOの「はづちを」としては、人件費や活動費を捻出するために、自前で収益事業を行うことになる。しかしながら、この不景気にあってNPOが利益の出る事業を行うことは容易ではない。

いま日本中のNPOが、活動資金の調達に忙殺され、本来事業がおろそかになるジレンマに陥っている。「はづちを」もそうだ。そこから「はづちを」がどのように活路を見出し、そこに当協議会や行政が、どのように関わって来たかを、「はづちを」が始めた“コミュニティ・レストラン”事業（略称コミレス）を例に報告しよう。

□コミュニティ・レストラン※

「はづちを」では本年3月9日から施設内の茶店で朝食サービスを始めた。誰でも利用できるが、主な対象者は食生活が不規則になりがちな老人やこどもである。温泉町では早朝や深夜に働く人もいて、朝食の準備もままならない家庭もあるところから、この事業を企画した。調理スタッフは地域から応募してきた高齢女性ボランティア4名であり、彼女たちの仕事づくりや生きがいづくりの役割も果たしている。料理は地産地消がテーマ。同施設で毎月第1第3日曜日に開く朝市「はづちを〇市（がわいち）」に出店している、地元農家や橋立漁港の水産業者から、米、野菜、干物などを購入する。食器も山代の温泉旅館から

行政とNPOの協働を追求する 非営利活動市民団体・はづちを

代表者：永井隆幸 連絡先：事務局 吉田栄治
加賀市山代温泉18-59番地1 TEL 0761-77-8270
<http://www1.kagacable.ne.jp/~hadutiwo/>



第1第3日曜に開く朝市“はづちを〇市（がわいち）”。総湯のまわりを曲輪（がわ）と呼ぶところから名づけた。



はづちを楽堂は、高齢者のパソコン教室、ビンポン大会、早朝太極拳などのサークル活動にも利用されている。

体に何度も足を運び、開催意義を説き、参加を呼びかけている。こうして、「はづちを」は知名度をあげ、地域のコーディネーターとしての実力をつけ、地域から信頼を得て、コミレス開業につながった。

さて、開業から2ヶ月経過したコミレスであるが、やや苦戦しつつも、楽しみにする常連のお年寄りもいて、朝食サロンの雰囲気も生まれつつあるという。一方、加賀市はこどもの利用者には半額支援（250円）を、条件付ではあるが、制度化した。「はづちを」と加賀市との関係はパートナーシップに向かって一歩前進した。



はづちをで提供している朝食

※コミュニティ・レストラン：地域の課題を解決することを目的に、運営される飲食店のこと。世古一穂氏が提唱している。女性や障害者の仕事づくり、ひきこもりや不登校の高校生などの社会参加など、いろいろなテーマで各地で運営や実験が行われている。

第18回地域づくり団体 全国研修交流会「岡山大会」

会期 平成15年1月16日(木)・17日(金)
会場 岡山県内各地

平成15年1月16日(木曜日)13時より、岡山県内各地で「分会」を開会、17日(金曜日)10時から倉敷で全体会を行い、12時に閉会する。私が参加したのは新見分会。参加者60名。ふたつ用意された分科会のうち、かのさと体験観光協会が主催した「ツーリズムの今・未来 その極意を学ぶ」に参加。参加者は39名であった。

1 新見市について

岡山県の北西部、中国山脈を背にした山間地。岡山から米子に向かうJR伯備線の車窓からは積雪が見えた。宿泊した新見千屋温泉は来年、スキー場がオープンするという雪深い山中にあった。温暖な印象のある岡山ではやや異質の、山間の盆地に開けた小都市である。主要産業は石灰石の採掘とセメント関連産業。人口約25,000人。昨年、国内初の電子投票で耳目を集めた。会場では「電子投票記念まんじゅう」も振舞われ、市長挨拶でもそれについて熱心に語られた。

2 分科会「ツーリズムの今・未来 その極意を学ぶ」

(1) 分科会の構成

新見の「かのさと体験観光協会」がコーディネートした。

第1部はパネラーのいないパネルディスカッション、約90分。

第2部は実習で竹炭ペンダントづくり、約60分。

(2) パネルディスカッションの内容

リクルート社の井手修身さんが進行役を務めた。

事前のハガキ・メッセージから「体験プログラム作り・商品開発」「組織運営」「告知の方法・プロモーション」の3点を課題として抽出、それに沿った展開となった。

参加者の中から「体験型」実践者を指名し、その場で事例発表してもらった。私も指名され、いしかわの紅茶づくりの話をした(後に沖縄の参加者から、沖縄でも紅茶づくりをしていることを聞き、帰ってから紅茶の交換をした)。

(2)-1:事例発表の一番目は「愛媛県の子農業小学校」

・農協職員から農業に転職。

・農業体験のない小学生や母親を募集。月に1、2回。休耕田で野菜栽培。会員は勝手に来て作業しても良い。収穫物は参加者で分ける。

・都会の子はよく田んぼに入る。あくまで体験なので、作業が「労働」にならないように、川遊びや栗拾いなどの、農村の遊びをプログラムに加えている。

・農業の大変さを伝えたい、との思いで始めた。安心して食べられるものを求める母親が参加している。こどもは遊びが楽しくて参加。

・年間会費は家族3万円。当初は町補助、今は国の補助があり、事業をやめたが、やめられない状態。

・やめたい理由は、くたびれたことと、多忙であること、後継者がいないこと。

(2)-2:事例発表の2番目は「岩手県観光協会」の三陸鉄道の干し柿イベント

・無人駅での干し柿つるし。一日のイベント。

・こどもが柿を採る。ばあちゃんが皮をむき、男衆がつるす。

・去年は1,000個

・干し柿になるまでつるす。

・お客は手の届く範囲なら取っても良い。

・最初の年は職員だけで始め、3年目は友の会も参加するようになった。

・参加は自由で参加費は500円。参加者は40名。

・三陸鉄道に乗って駅に来る。運賃は片道520円~590円。

・帰りの電車で宴会をする。手鮭のすり身汁、ホタテの燻製、カラオケなど。

(2)-3:体験観光事業の目的について

事業の楽しさは分かるが目的が見えないと私から質問したところ、かのさと体験観光協会の仲田芳人さんから「喜びはお金と生きがい」との答えがあり「商いは飽きない。繰り返し来ても飽きないプログラムづくり」を提案。テーマをプログラムづくりに移した。

(2)-4:体験観光資源の見つけ方について

井手さんの提言は「ごつごつしたものを与えたい、つくりたい」。その論旨は、

・ありきたりの体験ではなく、本物の体験が求められている。

・本物が感動を与える。

・本物は体験するのが大変で、難しく、時間もかかるが、だからこそ本物である。

・本物は暮らしに根ざしたものである。

・資源は人である。本物の体験に語るとか、学ぶとかのソフトをつけるのが人。

・事例として「ログハウスづくり体験」をパワーポイントで紹介。

(2)-5:体験だけがツーリズムではない事例

・農家民泊。大分県の安心院町(あじむ)の民泊は法律の壁を破り、県に認めさせた。

・長崎県波佐見町。陶磁器産業を再生し、客を呼び込む仕掛けとしてのツーリズムに。

(2)-6:組織運営

・残り時間が少なく、井手さんのレクチャーになった。

・宮崎県花のまちNAGANOの花一杯運動。活動10年の昨年に代表が辞めた。

・代表の活動範囲が広くなり、活動に時間をとれなくなったため。

(2)-7:情報発信。

・このあたりはリクルート社のもっとも得意とする分野。

・パワーポイントを使って、有用なデータが次々と紹介されたが、記録できず。

・要約すると、媒体としてはクチコミが一番効果的。事例紹介したログハウス体験も初年度は有料広告で参加者を集めたが、翌年からはパブリシティとクチコミによる情報発信と、リピーターで参加者を集めた。

・パブリシティにしてもらうにはメッセージ性の高いプログラムにすること。





・とんがった情報を集めている人にはインターネットも有効な手段になりつつあるとのこと。

・クチコミは身近な人やリピーターが媒体になることが多いので、身近なところに客が居るとの意識が大切。

・熊本県小国のツーリズム大学(昨秋に当協議

会の広報誌の取材で訪問)の参加者の入学動機は、開業希望12%、Uターン希望者27%、生きがい自分探し27%。生きがい探しや自分探しもツーリズムのテーマに成り得る。

(2)-8:竹炭ブローチ体験

・体験観光のプログラム紹介としての「竹炭」であると思ったが、インストラクターが兵庫県からこの日のために呼んだ「セミプロ」。実習の意味が不明になった。地元の人講師としてのレベルを見聞きすることが、大いに参考になると思い参加したのだが、当てが外れた。

・ブローチ作り自体は面白くて夢中になった。

3 コーディネーターとしての所感

地域づくりの交流会には極論すると、わが故郷は素晴らしいと称える「故郷賛歌」タイプと、わが故郷にはなにもないと嘆く「故郷怨歌」タイプがある。どちらも度が過ぎると聞き苦しく、どちらも建設的提案を含んでいれば、心に残り、人を動かす。新見分会は予想に反して故郷色(ローカルカラー)の希薄な大会であった。それで良かったのか、考えさせられた。

新見分会では地域づくり研修交流会のプログラムを作る上で参考になる、新しい手法をいくつか見ることができた。ただし、それらは新見のグループとリクルート社とで開発したものであろうが、リクルート社の存在を強く意識させる結果となった。新見でなくても出来る研修、井手さんさえが居れば、全国どこでも可能な研修内容、とも言えるのではないだろうか。

語り部がリクルート社の井手さん、体験の先生も兵庫県の人で、地元の人が地域づくりを語る場面がなかった。地元のグループの方はツアーコンダクターのように黒子に徹していた。地域の人が地域を語ることが、地域づくりの交流を意義あるものにする。このような意味のことをハガキにして、かのさと体験観光協会の仲田さんに送ったところ、原稿用紙3枚のFAXが返ってきた。その要約は。

・前回の群馬大会が群馬の取り組みの一方的な押し付けのように感じた。新見では地元は控えめに、地元の取り組みは当日の資料で確認してもらえば良いと考えた。

・リクルート社の井手さんを進行役にしたのは、彼を仲間だと思っているからだ。事業予算だけでつながる多くのコンサルと違い、リクルート社のスタッフはまちの課題を地元民と共有して、3年間付き合ってくれた。だから、井手さんとは事業の終わりが縁の切れ目になる関係ではない。

・来訪者をお客さん扱いせず、双方向のコミュニケーションをはかることを考えた。

仲田さんの考えにあえて反論する意味はない。もし、石川県で開くとしたら、との観点から、考え方を整理することが肝要である。石川型の地域づくりは、徹底討論による問題解決の手法を確立してきた。地域で抱える課題を、有識者や他地域の人に直接語りかけ、納得できるまで話し合うスタイルを、地域づくりシンポジウム、地域づくり談議、地域づくり実践講座で実行している。

(1) 地域の当事者にとっては、活動を紹介することによって、自らの活動を客観的にとらえる機会になり、他地域の参加者にとっては、個別具体的な悩み事から、より一般的な課題を抽出し、それを解決する方法を企画する機会となる。このような意味を持つ。

全国大会であっても、全国のニーズに合わせる必要はない。ローカルな課題を生のまま語ることは控えたいが、一般化して語ろうとすることは、語り手、聞き手の双方に意義があるように思う。

(2) 静岡の田中孝治さんが以前から提案しているが、地域づくりプロデューサーが必要な時代である。地域住民が自発的に参加する活動は、ともすれば財政的に弱く、継続性に乏しい。このような活動だけでは地域を変えることはできない。地域住民がボランティアとして関わる活動を、マネジメントする役割としての地域づくりプロデューサー。当協議会に則して言うなら、地域づくりコーディネーターがその役割を担うことになるのであろう。

(3) 静岡の田中さん、鳥取の福田さん、滋賀の阿部さんなど各県「協議会」の運営スタッフ有志と話し合ってきたことだが(4県会議を過去2回開催)、プロデューサーやコーディネーターを専門職として認め、その職能に見合った経済的な保障を与えるシステムをつくらなければ、地域づくりの発展はない、という段階に来ているのではないだろうか。地域づくりもまた社会的起業、市民事業、コミュニティビジネスの時代を迎えている。

(4) 喜劇王のチャップリンは人生に必要なものは「愛情と少しばかりのお金である」と語っている。地域づくりも同様である。郷土への愛情とお金がなければ地域づくりはできない。

かつては藩主や大地主、財閥が「パトロン」「旦那さん」となり、地域づくりを支援してきた。旦那さんがいなくなった現代社会では、市民、住民が旦那さんになって地域づくりを担わなければいけない。

いまの地域づくりは「ボランティアの薦め」や「生きがいづくり」といった余暇や余生への啓蒙活動を越え、地域社会や地域経済に果たす役割の視点から、語られるべきではないだろうか。中央集権から地方分権、分権自治へと社会の仕組みは根本から変わり始めているのである。

(赤須治郎 コーディネーター)



第18回地域づくり団体 全国研修交流会岡山大会

会期 平成15年1月16日(木) 17日(金)
会場 岡山県内各地

第18回 地域づくり団体 全国研修交流会岡山大会に参加して

■地域づくりわんたたきの成果

平成13年秋に「地域づくりシンポジウムいしかわー地域づくり「わんたたき」」が輪島の地で開催されました。その後も県協議会に参加している市内の地域づくり団体相互で連絡をとりあっています。もちろん市もそのお手伝いをしております。

そのような場で「今度、案内があった全国研修交流会に参加してみよう。市もいっしょに行きましょう。」という声があちこちからあがりました。素晴らしいことです。

距離的にも何とかかなりそうだから、どういうことをしているのかぜひ行って見てこよう、そして刺激を受けて私たちの活動に反映させましようという皆さんのお言葉です。ありがたいですね。

■全国レベルの石川の地域づくり

さて一行15名は市のマイクロバス「日本海シティ輪島」号で当地へ向かいました。朝3時出発という強行軍ではありましたが、岡山県西部の4地域で9分科会が開催されており、私たちは倉敷での3分科会に分かれて参加しました。

全体の運営体制等については別のレポートもあると思いますので、我が石川県で行われている地域づくりシンポジウムと比較した感想を述べるべきかな、と思います。

ひとことで言えば「石川の地域づくりより自信を持って、君たちは既に全国レベルだ。更に高い目標を掲げ、自己の目標を貫徹せよ。」ということです。(変な口調になりましたが。)

もちろん各分科会で発表される事例、皆さんの問題意識、解決プロセス等の一つ一つは大いに参考になりました。

市メンバーによる自主研修交流会や帰りのバスの中でも皆さん得るところが多かったようです。やはり現地に来て具体的な状況での活動を見聞きすること、特に今回のような練られた大会での各分科会で与えられたそれぞれのテーマについて全国からの参加者の意見を聞くことは、自分達の日々の活動と照らし合わせ、自分ならこう思うという意見をもって相手の発言を聞く場合には、得るところも多いと思います。もちろんそうですね。

■沸騰点を探る

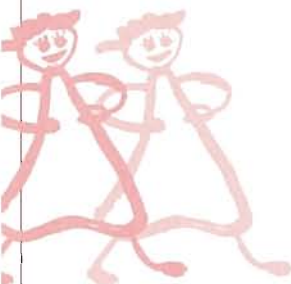
同時に、それがこの種の大会の問題点というか制約かとも思います。限られた時間の中で、当日及び将来において、参加者はもちろん主催者も最高の物をえる、そういう沸騰点に至るのは何れであっても難しいことと思います。

今回は秋田大会だそうです。メンバーからは「市はこんども行くんでしょ。自分で行ってもいいですね。」という声が聞かれました。従いまして市が行いました今回の参加は成果があったと思います。

しかし、石川県での全国交流会の開催を意識するとき、上記に石川のシンポジウムとの比較感想でも述べましたように、県シンポジウムは既に相当なレベルにあり全国大会もきつとやれるとは思いますが、「沸騰点」ということを考えるとき更なる創意工夫が必要なのではないでしょうか。それはいろいろな観点から考えられるべきだと思いますが、私は地域づくり活動一般に対する一層の価値観の付与だと思います。

なんだか話が変なところに流れましたが、大会参加報告の主題でこうなったということは、輪島市からの参加者には、今回の大会会場自体よりもそこで思いを巡らした自分たちのテーマにより関心があったということでしょうか。

(坂下利久・輪島市)



my page
編集後記

会長も事務局も代わって、新たなスタートを。課題は組織もメンバーもどこまで変わるか。新たなコンセプト、フレームを創造できるかが問われます。時代の閉塞感を突破するために必要なことは、all or nothingの選択ではなく、新たな案を生み出し、育てることです。(高峰)

石川県地域づくり推進協議会情報誌

MyPage

Vol.12 2003年3月発行

発行/石川県地域づくり推進協議会

事務局/石川県企画開発部企画課内
金沢市鞍月1-1 〒920-8580
TEL076-225-1312 FAX076-225-1315
✉chiiki1@pref.ishikawa.jp
http://www.pref.ishikawa.jp/kikaku/dukuriyou/chiiki/